乃木静子の悲劇を後世に、住民が再建へ資金募る　出身の鹿児島、接収された銅像 [鹿児島県]

2016年01月14日 00時11分

乃木静子

写真を見る

乃木静子の家の跡に残る銅像の台座＝鹿児島市新屋敷町

写真を見る

乃木静子と希典。亡くなった当日の写真ともいわれている（東京・乃木神社提供）

写真を見る

明治時代の陸軍大将乃木希典（まれすけ）（１８４９～１９１２）の妻静子（１８５９～１９１２）の銅像を再建する取り組みが、出身地の鹿児島市で進んでいる。日露戦争（１９０４～０５年）で長男と次男を失った悲しみに耐え、明治天皇の死の後を追って夫婦で心中。「殉死」とあがめられ、一度は銅像が建てられた。銅像は太平洋戦争で銃弾の材料にするために軍が接収。戦後は軍国主義復活につながると警戒され、再建されなかった。再建を目指す人たちは「静子も戦争の被害者。銅像で平和を訴えたい」と１１月の建立を目標に、資金を募っている。

静子は藩医の家に生まれ、２０歳で長州（山口県）出身の乃木と結婚した。乃木が、６万人の戦死傷者を出した中国・旅順攻略作戦を指揮したことなどから、愛息２人を戦争で失った際も悲しみを表に出さなかったとされる。

静子の銅像は、鹿児島市出身の実業家村野山人（さんじん）（１８４８～１９２１）が１９１９年、静子の家があった同市新屋敷町の甲突川左岸に建立した。接収の詳しい時期は分かっておらず、今は台座だけが残る。

戦後、市民から再建を求める声が何度か出たが、殉死を軍国主義と結びつける反対意見があり、市は消極的だった。２０１２年の没後１００年を機に、屋敷跡周辺の住民の間で再建を目指す機運が高まり、１４年９月に「乃木静子夫人奉賛会」を結成。残った台座の隣に再建することにし、街頭などで募金を集めている。建立費用は１千万円を見込み、既に半分が集まった。

会の事務局長で、屋敷跡近くの「船魂（ふなたま）神社」神職宮田昇さん（４３）は「台座だけでは寂しいと幼いころから思っていた。静子の人柄と悲劇を伝える銅像になればいい」と話した。募金の詳細は同会＝０９９（２２６）７４５７＝または会ホームページ。

＝2016/01/14付 西日本新聞朝刊＝